



カナダと日本を結ぶコミュニケーションプレス

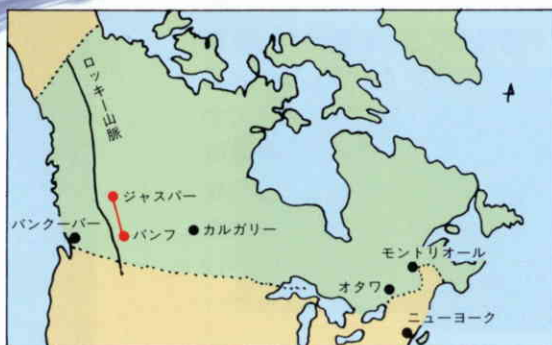
メイプル 東北

Vol.10

カナダ自然紀行

冬ならではの美しい風景、切り立った岩肌に雪化粧。

標高3643mのマウント・テンブル。神秘の湖・モレーン湖もすぐ近くにあり、麓にはロッジが建ち並ぶなど、カナディアン・ロッキーの観光拠点の一つ。切り立った岩肌に雪化粧された光景は、夏とはまた違った美しい表情を見せてくれる。





東北日本カナダ協会会長
明間 輝行

設立から満5年、実りの多い活動で21世紀へ

当協会は、生活、文化、学術、経済等の交流を通じて東北とカナダの相互理解を深め、友好親善関係を促進することを目的として、1990年12月に設立され、おかげさまで満5年を迎えることができました。会員をはじめ、皆さまのご協力に、改めて感謝申し上げます。

さて、当協会では、これまで、文化、芸術、経済をはじめ、各種のイベント、セミナー等を開催し、会員の皆さまの交流のお手伝いをさせていただいてまいりました。こうした行事をきっかけとして、最近では、会員同士のネットワークづくりが盛んになり、自主的な交流活動を進める熱心な会員の方もいらっしゃいます。

私どもといたしましても、このような交流の自主的ネットワークが広がり、カナダと東北の友好関係が一層深まっていくようお手伝いさせていただくことを本来の活動目的としており、最近の活動を見ると、5年間の成果が着実に現れているものと考えて次第でございます。

今後はさらに、カナダとの交流の充実に向けた活動を展開するため、例えば、在住カナダ人の方々にも参加を呼びかけられるような行事等を企画してまいります。このためには、一重に会員の皆さまとの交流・支援が不可欠でございます。

5周年をひとつの節目とし、21世紀に向け、今後とも一層のご支援・ご協力をお願いいたします。

●最近のカナダ協会のあゆみ●

- 95年7月20日 総会
・明間会長ならびに新役員選出
- 95年10月 東北カナダ協会のご案内パンフレット改訂
- 95年11月30日 音楽の夕べ
- 95年12月13日 クリスマスパティー

カナダ大使来仙

1月30日、仙台を訪問されたドナルド・キャンベル駐日カナダ大使は、カナダ名誉通商代表の明間会長と会談



されました。お二人は、最近のカナダの政治経済事情や、東北の経済状況などについて意見交換されました。

カナダから音楽家を迎え、和やかに交流 音楽の夕べ

11月30日、仙台市内のホテルで、カナダの音楽家を招待して、音楽の夕べが開催されました。カナダからいらっしゃったのは、バイオリニストのマーチン・フォスター(Martine Foster)、ピアニストのユージン・ブラウツスキー(Eugene Plawwtsky)のお二人です。

お二人は、カナダの大学で教鞭をとる傍ら、世界で演奏活動を続けており、CDもリリースされています。幅広いジャンルの中でも、特にブラジル音楽に造詣が深く、1988年には、ブラジル政府から、ヴィラ・ロボス賞を受賞しています。

当日、午後6時から開演された第一部のリサイタルでは、古典から、ブラジル音楽、さらには現代曲までが飛び出し、聴衆は、珠玉の旋律を奏でるお二人の真摯な演奏に聴き入っていました。1時間30分の演奏時間も終わり、アンコールの段になって、バイオリンの弦が切れるという熱演ぶりに、会場に詰めかけた40人の会員から一段と大きな拍手が送られました。

演奏後にお二人にお話を伺ったところ、「演奏会を行う場所は主にコンサートホールであり、ホテルの一室で行うことは殆どないが、今回のように聴衆を身近に感じながら、宮廷のサロンのような雰囲気で行うのが、本来の姿なのかもしれない。」と語ってくれました。

素敵な音楽に引き続いて行われた第二部のレセプションでは、カナダ大使館提供の、同国産ビール、ワイン、そしてウイスキーを堪能しながら、料理に舌鼓をうち、気さくな演奏者のお二人を囲んで、会員相互の交流の輪を広げました。



素晴らしい演奏で聴衆を魅了した、フォスター氏(左)とブラウツスキー氏(右)。

大自然以上に大きな国・カナダ

リポート：女川町議会議員／木村征郎

カナディアン航空の客室の窓からまだ夜が明けきれていないが、カナダの大地がはっきりと見えた。私は思わず隣の前中通り商店会会長のD氏と固い握手をした。理事長のS氏も加わった。互いの目が「本当にカナダに来たんだ」と興奮しながら笑っていた。

思えば平成4年、小さな商店会が大きな国際交流事業「カナダフェア・in・女川」を開催した際「いつか皆でカナダに行こう」と誓いあってから丸三年の歳月を経ての実現であった。20代から60代までの中通り商店街13人の会員が、今自らの足であのカナダの大地をしっかりと踏みしめていた。西海岸の表玄関バンクーバーから1988年のオリンピック開催地カルガリー空港に到着し、貸し切りバスで保養地バンフに向かった。数千キロも続くという高速道路には入口、出口のゲートもなく、あっけないような空間が続く。料金は当然無料。高速道路から眺める延々と続く雪化粧したカナディアンロッキーの山々は日本とは比較しようもないカナダの大自然そのものである。山々は決して絶景ではなく、スケールの大きさ故に覆い被さるような畏怖と、心を洗われる思いが錯綜する。



大自然の雄大さに比例してカナダの人々は道行く人々もホテルやレストランの人々も、いたって大様である。バンフの街のあちこちに鹿や山羊が散歩し、自然と人間と動物が共生していくというごく自然な社会形態が見えてくる。公共施設ばかりでなく、人の集まる所は一切禁煙というカナダの街はシンプルで美しく治安も良い。貸し切りバスも禁煙であり、飲物の接待はなく、排気ガスを考慮してお客が乗るまでエンジンをかけないから、乗った直後の車内は大変寒い。両国の価値観の相違がここにある。

わずか一週間のカナダの旅であり、カナダという大きな国のほんの一面しか見れなかったが、白人、黒人、インディアン先住民、アジア人等が分け隔て無く生活する社会はカナダという国が大自然以上に

大きな国のように思えてくる。カナダを離れる最後のホテルの夜、旅行参加者の一人が言った「コーヒー・オア・ティ、カナダイズ・ベリーグッド」。



グリーン&ホワイトクリスマスを満喫 クリスマスパーティー

12月13日、恒例のクリスマスパーティーが、仙台市内のホテルで開催されました。当日は、60名を越える会員に加え、カナダ大使館からステファン・ジョベ二等書記官をお招きして、盛大に行われました。

ところで、日本のクリスマスから連想するのは、ホワイトクリスマスですが、今回の東北日本カナダ協会のクリスマスでは、常夏のハワイのイメージを盛り込んだ趣向を採り入れました。仙台で活躍するハワイアンバンド「モレナエコーズ」が、スイングなスティールギターと歯切れのいいリズム、さわやかな男性コーラスで、心地よいポップス室内楽をきかせてくれ、会場は、グリーンクリスマスとなりました。

また、「南国のクリスマスもいいけどやっぱりロマンチックなホワイトクリスマス」という方にぴったりの趣向が、ご父兄の会員のお子さまによるキャンドルサービス。パーティーの半ばで、「モレナエコーズ」の「聖夜」に合わせて、男女ペアとなった小学生たちが、場内の各テーブルのキャンドルに火を灯していきました。静寂なムードの中で行われたキャンドルサービスは、子供たちと会員の大人たちとが一緒に盛り上がるのにふさわしい出し物でした。

最後はお待ちかねのビンゴゲーム。二人のサンタクロースが番号を読み上げるたびに、お互いに見合いながらワイワイガヤガヤ。緊張のリーチのあとに、当選者が手にしたのは、素敵なクリスマスプレゼントの数々。参加者全員満足感を胸に帰路につきました。



1度にグリーンとホワイトの2つのクリスマスを楽しみました。



LETTERS TO MAPLE

カナダに学ぶこと

個人会員 黄川田 守

いつかプリンスエドワード島へ

個人会員 上野 綾子

私は、赤毛のアンが好きでその舞台である「カナダ」への興味がずっとありこの協会に入りました。本の中での自然描写にはとても心ひかれるものがあります。

12月にありました「音楽とワインとタベ」では、カナダの音楽家による演奏とおいしいカナダ産ワインなどで、すてきなひとときをすごしました。ベートヴェンのソナタからドビュッシーそして現代曲など、いろんな時代の音楽をきき、バイオリンとピアノの様々なかわる音色が印象的でした。

自分の身近にカナダとのふれあいの場があるということのをうれしく感じるとともに、いつかプリンスエドワード島の風に吹かれながらのんびりお散歩したいなあと思っています。

私が見たカナダの素顔

個人会員 高橋 明子

私はライオンズCのYE生として都心トロント、地方ウッドストックに滞在しましたが自然と共生し肌で感じることでできるカンントリーライフは、カナダの素顔という印象があります。隣の家が500m先にあり、果てしなく続く素朴な道、7月頃の咲きほこる野花、湖で泳ぐ野鳥、リスが横切る姿、朝は爽やかな風が漂い夜は静寂が一面を覆い隠す、ホストファミリーや友人達との語らいには、今思い出してもホットな時間でした。自己のルーツを大切にしながら異文化に対しても許容性を持つ人々との出逢いは、何にも替え難いものです。現在もホストファミリーとは交流があり、ホストシスターの結婚式に招待され是非行くことと予定していましたが、仕事の都合で伺えず大変残念に思っていた矢先、ビデオテープが届けられ速く離れた日本で彼女の幸福を願いながら祝福をした次第です。

機会がある限り何度でもカナダを再訪問し友情を長くはぐくみたいと思っています。



いじめの問題解決は極めて難しい。複雑な要因と様相があるからだ。いじめは昔からあった、という方に申し上げるが、昔は弱い者いじめは軽蔑されたわけだし、目撃者にも憐れみの情があった(と思う)。ところが現代のいじめは、集団(強者)が一人(弱者)をターゲットにし、執拗にくり返すのだ。たとい同情の心が残っていても、いじめに参加しなければ自分がターゲットにされる。

いじめは遊びや喧嘩とは似て非なるものだ。ターゲットが毎回鬼になる缶蹴りは遊びではない。原因のない、しかも勝敗が見ええの喧嘩を誰が好んで毎日やるものか。

昨年末、日加協会主催、カナダのミュージシャンによるコンサートとひき続き懇親パーティにお邪魔した折、とても嬉しい体験をした。ひとりぼつんと水割り飲んでた私に、若いカナディアンが話しかけてくれたのである。聞けばこれは彼等のパーティでの常識であり、マナーだそう。(日本のいじめには無視という恐ろしいものがある)

バンクーバー島にあるドーバーベイス쿨を訪ねたことがあった。海山自然にも恵まれたこの学校にいじめ問題はない。彼等生徒は、趣味のお金は勿論、大学生活の費用もアルバイトで工面するという。自立の教育と風土があるのだ。一方、成績はレポートが重視され、よく調べよく考えるという。

今の日本は、保護(管理)の名のもとに自立を奪い、効率(偏差値)のために考える力を奪ってはいないか。いじめ問題対策でも迅速ではあるがカナダに学んでいい。

友好のかけ橋

日加貿易促進に取り組む

カナダ大使館二等書記官(商務)フランソワ・リベ(Francois Rivest)氏。1991年外務省(カナダ)入省。1994年8月に来日以来、建材などの輸入受託関連を中心に、日本とカナダの貿易の架け橋として精力的に活動してきた。

来日前の日本の印象は、「仕事のしすぎ」、「物価高」、来日後感じることは、「Hospitality(歓待)」、「Composure(はずかしがりや)」と語るリベさんは、仙台とカナダに相似性を見ている。一緑、山、澄んだ空気、そして、ひと。しかし、日本人はカナダのことをよく知らないし、カナダも日本のことを誤解しがちな



は残念、とりべさんは語る。

カナダから日本への輸出に関して、市場、顧客などの関係づくりに時間がかかり過ぎる点を指摘するリベさんは、あるカナダの窓メーカーが、そうした日本との関係づくりに5年もの歳月を費やした例を挙げる。世界中で、国と国との関係が変化し、緊密に発展している中、日加関係もその例外ではない。両国の関係強化を切望するリベさんは、貿易関係の強化によって、最終的には、両国の国民に大きな利益がもたらされるという。

“We have a lot to learn and benefit from continuously strengthening the trade relationship and other fields.”

この言葉の中に、日加貿易促進に取り組むリベさんの情熱が伝わってくる。

〈INFORMATION〉

◎10月の「カナダツアー」に参加しませんか

東北日本カナダ協会では、カナダとの友好・親善などを目的とした、「カナダツアー」を、平成8年10月上旬に、1週間程度行う予定です。詳細は、後日、会員の皆さまにご案内いたします。多数のご参加をお待ちしております。



◎Letters to Maple(メイプルへのお便り)欄にお便り募集

メイプルにおたよりをお寄せ下さい。カナダに関することならなんでも結構です。おハガキ、封書またはFAXで、当協会宛にお送り下さい。

1996年3月発行

発行人/東北日本カナダ協会 The Tohoku Canada-Japan Society

〒980 仙台市青葉区一番町三丁目7-1

東北電力 地域交流部内

TEL. 022-225-3052(直)

FAX. 022-227-8390